

良寛歌集散歩

—良寛における老いの自覚—

和田 浩

老いは自らの心の中にどのような形で自覚されるものであろうか。自分が自らの老いを口にするとき、えてして当人は、俺はまだまだ若いと思っていたりするのである。しからば、周囲がそれを既成の事実として受け入れているらしい雰囲気を感じる時がそうであるのか。例えば、電車で若者から思いがけず席を譲られたりしたときに。あるいは、愚痴や短気を起こすことが多くなると自省の念が兆したりする時などであろうか。

いずれにしても、老いの自覚とそれへの対処は、老年における重大事であるように思う。このことに対して、良寛さんはどのようであったのか。社会的立場としての家を持たず、僧侶としての立場を保障する寺も持たず、まさに無一物の沙門として生きた良寛さんの場合、その老いの問題は格別切実なものがあつたように

思われる。それを良寛さんどのように感じ、受け止め、処理したのであつたか、良寛さんの和歌を手がかりにして考察してみた。

もとより、良寛さんは、和歌だけでなく、漢詩を数多く作っており、その中に例えば次の如く老境をうたったものが幾篇かはあ

○ 冬夜長

老朽夢易覚 覺來在空堂 堂上一盞燈 挑尽冬夜長

● 老いさらばえた身の夢は覚めやすく 目覚めてはわが身を空室に見る

部屋には点る一筋の灯火 燃え尽きてなお冷たく暗い冬の夜の長さよ

また

○ 六十有余多病僧 家占社頭隔人烟 巖根欲穿深夜雨 灯火明滅古窓前

● 六十過ぎの病弱の僧たる我 家は乙子神社の一隅にあつて里遠く

山の巖をも穿たと降る深夜の雨 灯火はそよぐわびしい窓の辺に

これらの漢詩にも老いと向かい合っている良寛さんの姿が描出されているが、何と云っても老いに関して良寛さんは、和歌（短歌及び長歌）を数多く残しているのである。そして、おおむね漢詩におけるよりも和歌において、良寛さんの生身の声が生々しく響いてくるように思うのである。

例えば知人宅を訪問して一人庵に帰る途次の歌

○ 老が身のあはれを誰に語らまし杖を忘れて帰る夕暮

● 年老いたわが身のあわれさを誰に語れよう 杖を忘れて山の庵に帰るこの夕暮れの

この短歌からは、物忘れに自らの老いを思う良寛さんの心の動きが息遣いのごとく伝わって来て、人間的共感を誘われる。

そこで、まず、自らの老いを主題とした「老いをなげくうた」二十首から、良寛さんの老いの心を吟味してみる。

なお、各和歌の番号は、朝日新聞社 日本古典全書『吉野秀雄校註 良寛歌集』昭和四十八年刊 によった。

※良寛さんの老いの嘆き※

○ 老いをなげくうた（老いを嘆く歌）

752 み山木も花咲くことのありといふを年経ぬる身ぞはかな

かりける

● 深い山中の木も花咲くことがあるというのに年を経たわが身のはかないことよ

753 百草の花の盛りはあるらめど下くだちゆくわれぞともしき

● 草草の花の盛りはあるようであるが年老いていくばかりの我身のかなしさよ

754 あらたまの年やつみけむしのぶ草宿には早くおひにしものを

● 年月を積み重ねたのであろう忍草がわが庵に早くから生えるように私も歳をとったものよ

これら三首の歌は、自然と向かい合い、それとの対比またはそれに仮託する形で自らの老いを詠嘆したものと見える。殊に冒頭の歌には、花を咲かせ実を結ぶこともなかった自分の人生への嗟嘆があわれ深く詠じられている。

755 しをりしてゆく道なれど老いぬればこれやこの世のなごりなるらむ

● 帰り路のための目印の枝折りをしてゆく道ではあるが年老いたわが身であるのでこれがこの世の名残 再び帰ること

はないであろうよ

756 老いぬればまことをぢなくなりけり我さへにこそおどろかれぬれ

● 歳をとったのでまことに意気地がなくなってしまった 自分自身にさえもびくっとさせられることよ

この二首の歌は、自らの老いそのものを詠嘆したものであるが、「しおりして」の歌には、枝折ることがせめてもの自分の生きた証とも思えるという良寛さんの人生への思いが伝わってくる。殊に下の句には老いた命への情感の高まりが見事に表出されているように思う。

757 老いらくを誰がはじめけむ教へてよいざなひ行きてうらみましものを

● 歳をとるということを誰がはじめたのであるか教えて欲しいものだ 訪ねて行って恨みごとを言ってやりたいことよ

758 惜しめどもさかりはすぎぬ待たなくに尋めくるものは老いにぞありける

● どんなに惜しんでも盛りは過ぎてしまった 待ってもいないのに訪れてくるのは老いであるよ

760 ちはやふるいづれの神を祈りなばけだしや老をはらはさ

むかも

● ありがたいどの神様にお祈りをしたら老いというものを放り捨てられるのであろうか

761 をつつにも夢にも人の待たなくに訪ひ来るものは老にぞありける

● 現にも夢にも人が待っているものではないのにやって来るのは老いというものであるよ

これら四首の歌は、生あるものは必ず老いねばならぬという定めに対し、またそれを定めた神に対し嘆き、愚痴をのべる形の歌で、ある意味では「遊び心」も感じ取れる詠みぶりである。

※良寛さんの「不老願望」※

次の五首の短歌は、老いることへの哀しみを、不老不死の国への憧れや、老いの定めを擬人化することでそれへの抗いがたさを詠んだものである。前四首に同じく「遊び心」の内に切実な思いの綯い混ざった歌である。

762 昔より常世の国はありと聞けど道を知らねば行くよしもなし

● 昔から歳をとらない国はあると聞くが道が分らないので行くこともできない

763 老いもせず死にせぬ国はありと聞けどたづねて往なむ道の知らなく

● 歳もとらず死にもしない国があると聞くけれど訪ねていく道も知らなくて

764 しげ山にわれ^{そま}柚たてむ老いらくの来むてふ道に閑据ゑむため

● 木々の生い茂る山に柵を立てよう老いがやってくると言う道に閑所を設けるために

765 老の来る道のくまぐま標結へばいきうしといひてけだし帰らむ

● 老いがやって来る道の隅々に標を結び結界を張れば 行き難いといって老いが引き返すであろうとも思ったりするこ

とよ

これら三首の短歌は、次の長歌の反歌である。

○ 老いをのぶる歌

行く水も せけばとまるを 老いらくの またかへるとは
うつそみの 人も語らず 外国の 書にも見えず いにし
へも かくやありなむ 今の世も かくぞありぬる 後の

世も かくこそあらめ かにかくに すべなきものは 老いにぞありける

● 流れ行く川の水も堰き止めれば止まるものだが老いた者がまた若返るとはこの世の人も言わないし異国の書物にも見えない 昔もこのようであったのか今の世もこのようである 後の世もこのようであろう にもかくにもどうしようもないものは老いというものであるよ

この長歌を読めば、もとよりのことではあるが、良寛さんの不老願望は、「かにかくにすべなきものは老いにぞありける」ということをわきまえた上での悶え、煩惱としてのものである。それを言葉に表すことによつて、そういう自分をおかしみを持って眺めているようなところも感じられる。

766 たまほこの道のくまぐましめゆはば行きし月日のけだしかへらむかも

● 通り道の隅々に標を結ったら過ぎ去つて月日が引き返してくると思えるよ

この短歌は、次の長歌の反歌の一つである。

○ 老いをいたむ歌

ゆく水は 塞けばとまるを 高山は 毀てば岡と なるもの
のを 過ぎし月日の かへるとは 書にも見えず うつせ

みの 人も語らず いにしへも かくやありなむ 今の世も かくぞありける 後の世も かくこそあらめ かにかくに すべなきものは 老にぞありける

● 流れゆく川の水は堰き止めれば止まるのに 高い山は崩せば岡となるものなのに 過ぎ去った月日が再び帰ってくる とは書物にも見えず世間の人も言わない 昔もこうであったろうか今の世もこのようであるよ 後の世もこのようであらう とかくどうしようもないものは老いというものであるよ

長歌については、「老いをのぶる歌」も「老いをいたむ歌」も 一部言葉の違いはあるが、「かにかくにすべなきものは老(い)にぞありける」との詠嘆で終わる同内容の歌である。

こういう例は、良寛さんの和歌においては、数が多い。これは、即興性とか推敲の跡とかの視点からだけでなく、それだけ、その和歌の主題について思い入れが強いとも読むことができよう。

※良寛さんと白髪※

良寛さんの歌には、老いと白髪を結びつけたものが多く見られ

る。出家者として禿頭であるはずの良寛さんが白髪にこだわるのは面白いことではあるが、毎日剃刀を当てるわけではない乞食の僧として、短くても白髪は現実のことでもあったと思われる。

まず、短歌から見てみたい。

767 白雪は降ればかつ消ぬしかはあれど頭にふれば消えずぞありける

● 白雪は降るそばから消えてしまうが頭の髪の毛に降った白ものは消えてくれないことよ

この短歌は、次の長歌の反歌である。

白髪

○ 宵よひに 霜はおけども よしゑやし 明くればとけぬ 年のはに 雪はふれども よしゑやし 春日は消えぬ し すがに 人のかしらに 降り積めば 積みこそまされ あらたまの 年は経れども 消えずぞありける

● 宵毎に霜は降りるがそれはそれ朝には融けてしまう 年の初めに雪は降るけれどそれはそれ春の日差しには消えてしまふ それなのに人の頭に降り積もると 融けずにどんどん積もるだけで 年月がたっても消えないことよ

768 白髪はおほやけものぞかしこしや人の頭も避くといはな

くに

- 白髪はたいしたものだ恐れ多くも人間様の頭も避けるとは
言わないことだ

769 世にみつる宝といへど白髪にあに及ばぬや千千の一つも

- 世に満ちる宝といつても白髪にはどうして及ぼうか千分の
一も

770 しらかみはよみの尊のつかひかもおほにな思ひそその白
髪を

- 白髪は黄泉の神の使いであるよいい加減に思つてはならな
いぞその白髪を

これら三首の短歌は、次の長歌の反歌である。

白髪

- かけまくも あやにたふとく 言はまくも かしこきかも
な ひさかたの あまのみことの みかしらに しら髪生
ふる あしたには 臣を召さしめ 白銀の 毛ぬきもち
て その髪を 抜かせ給ひて しるがねの 筥に秘めをき
あまつたふ は嗣のみ子に 伝ふれば ひつぎの皇子も
つがの木の いやつぎづぎに かくしつづ い伝へますと
聞くがともしも

- 口に出すのも大変尊く言うにも恐れ多い天の尊の御頭に白

髪が生える 朝には臣下をお召しになり白銀の毛抜きでそ
の白髪を抜かせなされて白銀の筥に密かに入れ世継ぎの御
子に伝えればその世継ぎの御子もまた次々に同じように伝
えられていると聞くことが心惹かれることよ

771 あづさゆみ春はたても消ぬものはかしらにつもる雪に
ぞありける

- 立春を過ぎても消えないものは頭に積もる雪（のごとき白
髪）であることよ

772 しらかみと雪はいづれとわかねども春日の照れる時にぞ
しるかる

- 白髪と白雪とはどちらがより白いと区別が付かないほどだ
が春の日差しの下でこそ輝くようであるよ

これら六首の歌は老いを白髪に象徴させ、それを雪に見立てた
り、雪と対比したりするなどの手法で、自らの老いを確認し詠嘆
したものである。殊に770の歌には、これまでの生活がいつま
で続けられるか、これからへの覚悟を迫られる心情が吐露されて
いるように思える。

以上、「老いをなげくうた」二十首は、良寛さんが六十歳にして托鉢行に困難を覚え始め、五合庵から少しく里に近い乙子神社の草屋に移って、六十九歳島崎の能登屋別舎に引き取られる間に作られたものである。つまり、良寛六十歳代の心境ということになる。もちろんこの時期の歌には、この二十首以外にも老いを主題にした和歌は多い。

※年月と相撲を取る良寛さん※

次に過ぎゆく時間としての年月に対する良寛さんの歌を見ていきたい。まず、良寛さんの支持者の一人阿部定珍に宛てた手紙の中の二首である。

○ いささか病中の心やりに

● いささか病中の気晴らしに《阿部定珍宛手紙》二首

773 年月のさそひて去なば如何ばかりうれしからましその老
いらくを

● 去り行く年月が老いというものを連れて行ってくれたらど
んなにか嬉しいであろうに

774 わが宿を箱根の関と思へば年月は行く老いらくは来る

● 私の庵を箱根の関所と思うからであろうか年月は行き老いはやって来る

これら二首の歌には、詞書どおりの「心やり」の知的戯れのなかに、老いを気にせざるを得ない心と体の弱りを感じ取ることが出来る。

○ 御歳暮として酒一樽にんじん牛蒡油揚うやうやく拝受候
● お歳暮として酒一樽、人參、牛蒡、油揚げありがたく頂戴
いたしました。《この部分は同じ手紙の続きである》

これから後の十五首は同じく雑の部の和歌で、詞書等のないのであるが、年月と老いを主題としたものである。

775 年月はいきかもするに老いらくの来ればいかずは何つも
らむ

● 年月は去ってしまうのに老いというものは来たらずに往くこと
なく何故積もるのであろうよ

776 行く水は塞きとむこともあるらめどかへらぬものは月日
なりけり

● 去り行く水は塞き止めることもあるだろうが二度と帰ること
のないものは月日というものであることよ

777 行く水はせきとどめてもありぬべし往きし月日のまたかへるとは

● 去り行く水はせき留めるといふこともあるであろうが一度過ぎ去った月日が帰ることはありえようか

778 行く水はせけばとまるを紅葉ばの過ぎし月日のまたかへるとは

● 行く水は塞き止めれば止まるものだが紅葉葉のごとく過ぎ去って月日が再び帰ることはない

779 いにしへの書にも見えず今日の日のふたたびかへるならひありとは

● 古の書物にも見えないよ今日の日が再び帰る習いがあると

780 ひさかたの雲のあなたに關すゑば月日のゆくをけだし止めむかも

● 雲の向こうに関を設けたら月日の去り行くのをとどめるといふことがありはしないか

781 ねもごろのものにもあるか年月は賤伏屋も尋めて来にけり

● 念の入ったことであるよ年月は数ならぬわが身を置くことの小さな庵にも訪れてくることだ。

この短歌は、前掲の長歌「老いをのぶる歌」の反歌の中の一首である。

782 うたてしきものにもあるか年月は山の奥まで尋めて来にけり

● うつとうしいことだ年月というものはこんな山奥まで訪れてきたことよ

この781、782の短歌は、前掲の長歌「老いをいたむ歌」の反歌の内の二首である。

783 はじめより常なき世とは知りながら何ぞわが袖のかわくことなき

● 始めからこの世は無常のものと分かっているのにどうして

私の衣の袖は涙で乾くことがないのであるうか

784 あらたまの長き月日をいかにして明かし暮らさむ麻手小袂

袂

● 老いの身に長い月日をどのようにして明かし暮らそうか
いただいた小さな布団よ

785 ひさかたの長き月日をいかにしてわが世わたらむ麻手小ぶすま

● 長い月日をどのようにしてわが身を過ごそうか小さな布団
よお前に包まってすごそうか

この784、785の歌は、それぞれ、長歌「悲求古歌」「為求古述懐」の反歌である。これらは、良寛さんの少年期の漢学の師であった大森子陽の息子で数奇な生涯を生きた大森求古を悼んだ長歌の反歌として添えられているものであるが、その痛切な内容は、そのまま良寛さんの身に重ねて読んでも差し支えないものと思う。その長歌「為求古述懐」次に掲げる。

為求古述懐（求古の為に懐いを述べる）

○ わくらばに 人となれるを 何すとか この悪しき氣に
さやらえて 昼はしみにらに かどさして 夜はすがらに
人のぬる 熟睡^{うまい}もいねず たらちねの 母が在^ましなば か
い撫でて 足らはさましを わかくさの 妻がありせば
かいてもちて はぐくまましを 家とへば 家もはふりぬ
はらからも いづち去ぬらむ 鶉なく ふるさとすらを
草枕 旅寝となせば ひと日こそ 人もみつがめ ふた日
こそ 人もみつがめ ひさかたの 長き月日を いかにし
て 世をやわたらむ 日に千^ちたび 死なば死なめと 思へ
ども 心に添はぬ たまきはる 命なりせば かにかくに
すべのなければ こもりゐて 音^ねのみし泣かゆ 朝夕ごと

に

● たまたまに人として生まれたのにどうしたことかこの悪い
運気に災いされて 昼間は隙間無く門を閉ざして夜は夜通
し人が寝るような熟睡もできず 母がいらっしゃたらな
でさすって寝させてくれるだろうに 妻がいたらばた餅を
作って食べさせてくれるだろうに 家を訪ねるとすでにつ
ぶれており身内の者も行方しれずで ふるさとにおいてさ
え旅寝するありさま 一日間であつたら人も貢いでくれよ
うが二日間であつたら人も貢いでくれようが これからの
長い月日をどのようにして暮らしていったらよいか 一日
何回も死ぬならよろこんで死のうと思うけれど 思いどお
りにならない命であるので どうもこうも仕様がないので
部屋に引きこもって声をあげて泣くばかりであるよ 朝な
夕なに

「悲求古歌」は、母も家も無く、はらからもふるさと頼めな
い境涯で老いを生きる辛さ心細さを詠じたもので、「為求古述懐」
とほぼ同じなのでここでは掲げない。

786 明日あらば今日もやかくと思ふらむ昨日の暮を昔なりけ

る

- 明日も生きていれば今日のことと同じく思うのであろう昨日のことはもう昔に思えることよ

この歌の、「昨日の暮」が最早「昔」と思われるという時間的不連続感、将来への強い不安によるものであろうか。

- 787 今日の日をいかに消たなむうつせみのうき世の人のいたまくもをし

- 今日一日をいかにして過ごそうか辛いこの世の人のなんといたましくももつたいたいことよ

- 788 なよたけのはしたなる身はなほざりにいざ暮らさましひと日ひと日に

- 弱竹の葉のようにしまらないわが身はいい加減に暮らそうよ一日一日を

- 789 ゆくりなくひと日ひと日を送りつつ六十路あまりになりにつらしむ

- 自分でも思いがけずその日その日を過ごしながらいつか六十歳余りになってしまったことよ

これら三首の歌には、ある時ふいに己の老いを自覚し愕然とする、白髪三千丈の思いが、せつなくも歌い上げられている。何と

気が付けば六十路を幾つも超えてしまっている、かといって、自分には別の価値有る生き方があったわけでも、また新しくできるわけでもない、そう思うと「いたましくもをしき」思いに駆られながら「なほざりに」一日一日を暮らすほかはないのである。

以上、ここで見てきた短歌十七首及び長歌には、年月(時間)を相手として対話をするというよりは、いわば渾身の力を込めて相撲を取る良寛さんの心の姿が見られる。

次にこのほかの老いに関する短歌を順不同で挙げる。

《功成名遂而身退天道也》

(功成り名遂げて身退くは天の道なり―老子―)

- 790 思へ君こころなぐさむ月花も積れば人の老となるもの
● 君よ思え心を慰める月花も積み重ねれば人の老いをもたらすものであることを

このような贈答の歌はともすれば歌そのものとしては観念的になりやすいものである。

ただ、良寛さんが、若い頃、諸国行脚の折、老荘の書を携えていたことが、近藤万丈の書に見えることを思い起こすと、それへの親しみが生涯にわたっていたことが、この歌の詞書から推測できる。

○ 肱夢老人の植えましし柏木を見てよめる

(肱夢翁が植えられた柏木を見て詠んだ歌)

749 むな木にもなるべくなりぬ柏の木うべわが年の老いにけるかな

● 家の棟梁にもなれるほど大きくなった柏木 なるほど私も年齢をとったことよ

この短歌は、前の790の歌に比し、観念的でない属目の実感がこもっていてしみじみと味わうことのできる歌である。なお、肱夢老人は良寛さんの親しい友であったことが、「春夜与肱夢歩月到田舎途中作（春夜肱夢と月に歩し、田舎に到る途中の作）」の漢詩があり、その詩句に「携手歩遅遲（手を携へて歩み遅々たり）」とあることなどから分かる。

○ 年のはてに鏡を見て（年の終わりに鏡を見て）

750 白雪をよそにのみみてすぐせしがまさになが身につもりぬるかも

● 白雪をよそごとに見て過ごしてきたが他ならぬこのわが身に積もっていたのであるよ

この短歌は一見平凡な発想、言葉遣いであるが、己自身が老境

に入ってみると、好ましい歌として始めて実感を持って味わうことができるのである。

以上、良寛さんが自らの老いを自覚し、いかにそれに対処しようとしたかを、主にその和歌を手がかりにして吟味してきた。それは、良寛さんが国上山の五合庵から、より麓に近い乙子神社の草屋に移り、さらについて山を下りて島崎の支持者である木村氏の許に身を寄せるまでの六十歳台、十年間と合致する。そして、七十四歳で亡くなる最晩年には、次のような痛切な長歌を残すことになるのである。良寛さんは、激しい下痢に悩まされ衰弱し死に至ったのである。享年七十四歳。

○ この夜らの いつか明けなむ この夜らの 明けはなれなばをみな来て はりを洗はむ こいまろび あかしかねけり 長きこの夜を

● この長い夜はいつになったら明けるであろうか この夜が明け切ったならば世話をしてくれる婦がきて糞尿を洗ってくれるだろう それを待ちかねて輾転反側し明かしかねることよこの長い夜を

ひたすらに命愛しみ老いの身を天に委ねし良寛を思ふ

(高松大学発達科学部講師)

高松大学紀要
第 49 号

平成20年 2月25日 印刷

平成20年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841 - 3255
FAX (087) 841 - 3064

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町 1 - 8 - 10
TEL (087) 833 - 5811